

## 中学校地理教育を考える

### —身近な地域の学習—

田丸 明史\*

#### I. はじめに

学習指導要領の身近な地域の学習に関する前半部分には、「身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を通して地理的な見方や考え方の基礎を見につけさせるとともに、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせる」という記載がある。この部分は、平成元年の学習要領から大きく変わっておらず、今回の改訂でも、そのまま残っている。

これをもとにかつて我々が行っていた授業というのは、「身近な地域=札幌」という前提で、札幌の地図を使って等高線をなぞってみたり、あるいは地図記号を探したりという、非常にオーソドックスな授業であった。しかし、今回の改訂では、後半部分に「市町村規模の地域的特色の視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身につけさせる」という内容が付け加えられた。我々は、この部分が非常に重要であると考え、「身近な地域」の学習というものを、従来とは大きく異なる新しいタイプの授業として展開させなければならぬと感じた。特に、私の所属している札幌市社会科教育連盟の地理分野においては、2001年頃から、この「身近な地域」の授業づくりをしっかりとやって行こうということになり、その中で研究を進めているところである。今回の報告では、この研究を進めつつ、2002年に私自身が行った授業の実践例について紹介したい。

#### II. 身につけさせたい力と教材

最初に、身につけさせたい力と教材化という点について考えてみたい。

小学校において調査学習の基礎を学んだ生徒た

ちが、中学校の地域調査の学習において求められるものは何かというと、複数の資料（地図やグラフなど）を用いて、地域の特徴をより多角的・論理的に説明できる力をつけることである。これは、単なる知識として身につけていた特徴や、場合によってはなんとなく思い込んでいた地域の特徴を、複数の資料から得られた事実に基づいて証明する力を身につけさせることでもある。そのような力をつけさせるためには、生徒が課題解決のために試行錯誤し、課題に対する見方や考え方を深める必要がある。つまり、生徒自らが課題意識を持って調査活動を行う授業が有効であると考えられる。

子供たちにとっては、知識として持っているものと実際の風景とがなかなか結びつきにくい。小学校でいろいろと地理の勉強をしてきたことで、地図はよく読み取れるのだが、その地図がいったいどの地図なのかとなると分からなかったりする。それを何とか結びつけていけるような学習展開ができないかと考えたときに、最初に注目したのが京都であった。京都には寺が多いということは、社会が苦手な生徒でもよく知っているので、「京都にはお寺が多いよね、どれくらい多いと思う？」と問いかけた。しかし、そう聞かれても、答えは出てこない。そこで、実際に5万分の1の地図を渡してやると、その寺の多さに驚き、さらに、「えっ？ お寺の裏にお寺があるぞ。そうすると、実際の街並みはどんなのだろう？ 先生調べてみたいよ」というような意欲が湧いてきたのである。

こういうことが、自分の知識と現実の風景が結びつき、そして自分で調べてみようという意欲に

\*札幌市立柏中学校

つながる授業なのではないか、こういう力をつけさせることが、今回の「身近な地域」の学習の大きなポイントなのではないかと考えられる。

地域の特徴をより深く、より正確に探るために、地図・地形図から多くの情報を得たり、新たな発見をしたりして、課題を解決できたときの楽しさは、生徒たちの学習意欲を大きく向上させる。そのためには、地図・地形図や資料から情報を正確に読み取る力をつけなければならない。最初の段階では、生徒たちが持っている地域に対する知識を地図で確かめる活動が有効である。京都の寺についての学習はその一例である。5万分の1の地図で、京都の寺の多さに圧倒され、自分たちの持つ知識と実際の様子に大きな差があることに気づく。そして、実際に街並みを見てみたいという好奇心が生まれてくる。このように地図記号ひとつを活用するだけでも地図に親しみを感じ、調査活動への意欲を引き出すことができる。これは、地図に限らず、統計資料でも同様である。このような活動を繰り返すことによって、単なるイメージから、もっと知りたい、見てみたいという関心を引き出し、調査活動へと結びつけていく学習展開が有効である。身近な地域の学習が、その第一歩となる。

しかし、どのような材料を使えば、子どもたちをハッとさせることができるのかについては、非常に難しい。京都の寺については、たまたま成功した事例といえる。つまり、生徒たちの誰もが、京都には寺が多いという漠然とした知識を前提に5万分の1の地図を広げ、地図に関心を示した生徒のなかから、今度は札幌の5万分の1の地図を見ながら寺を探して京都と比較する者が出てきた。しかし、漠然と「東京の地図と札幌の地図を比較してみよう」と言うただけでは、生徒の集中力は生まれなかつたろうと思われる。つまり、何を教材として選ぶかというのが、非常に重要になってくるのである。

都道府県や国単位の調査活動においても、生徒たちは身近な地域での学習を活用して、地図や統計資料などを比較したり、関連付けたりして地域の特徴を捉えようとするはずである。さらに、歴史的分野の学習においては、複数の資料の比較から歴史的な事実を捉えたり、公民的分野において

も地方自治の観点から身近な地域を扱う際に、地域を先入観だけで捉えたり、感情論だけで発言したりすることなく、複数の資料との比較・関連に基づく事実から考察できる力が身につくことを期待している。身近な地域の学習においては、地域の諸事情・諸事象を取り上げ、観察・調査などを通して地域への理解を深めさせ、同時に地域的特色を捉える視点や方法を身につけさせることを狙いとしている。そのため、生徒が「身近である」と実感している範囲を押さえたうえで、身近な地域の学習を組み立てていくことが大切であると考えた。

### III. 生徒にとっての「身近な地域」と考察の切り口

まず、生徒たちにとって「身近な地域」とはどこからどこまでなのかを把握するために、アンケートを実施した。生徒たちの身近な地域は予想以上に狭く、校区周辺の日常的な行動範囲であることが確認できた。そこで、身近な地域を柏中学校の校区とその周辺、いわゆる中央区山鼻地区に限定することにした。今まで身近な地域の学習は、札幌市という形で授業をすることが多かった。というのも、校区周辺については小学校の授業でやっていたので、あえて中学校で触れる必要はないと思ったからである。しかし、学習指導要領の最初の部分にも書かれている「生徒が生活している土地に対する理解と関心」という点を考慮すると、生徒たち自身が身近であると感じる地域は、アンケートをふまえて、かなり限定的な範囲に設定する必要がある。そして、その地域を教材として、今度は生徒たちが驚くような数字・統計をその範囲で探さなければならないと考えた。

山鼻地区といえば、歴史的に山鼻屯田兵村があり、今でも街並みにその面影を残している。身近な地域を学習する上でも、山鼻地区は教材化する価値が高い。また、生徒たちは小学校においてもこのことを学習しており、中学校においてもそれを発展させた学習を十分に考えていくことができる。しかし、今回の身近な地域の学習では、地理的分野と都道府県や国単位の調査活動につながる学習と位置づけているので、歴史的要素の強い山鼻屯田兵村を地理的分野で扱うことはあえて避け

ることとした。そして、山鼻地区の現在を捉えるために、生徒たちが生まれた12年前と現在の山鼻地区の移り変わりを、地図、地形図、統計資料などを利用し、特に人口の推移から捉え、そこから課題を見出し解決するという学習を目指した。

札幌市全体と山鼻地区の過去12年間の人口推移には大きな違いがあり、その違いはどこに原因があるのかを考えさせ、それを地図の読み取りや調査活動を通して明らかにしていくことにした。このように、人口を切り口に地域の特徴を学習することによって、生徒たちが、今までとは違う地域への理解や興味を深め、社会的事象に対する見方や考え方の高まりを期待した。山鼻といえすぐに屯田兵村に結びつき、また、山鼻記念館に行けば多くの歴史的な財産を目にすることもできる。我々もこの点についてはいろいろと考えたが、あえて歴史には触れず、時間を遡るとしても、生徒たちが生まれた頃の山鼻地区と現在という、非常に短いスパンで地域の特徴を考えさせてみようということになり、その材料として、人口の推移に着目して授業を作ることにしたのである。

#### IV. 授業展開

ここからは、具体的な授業の構成について紹介したい。単元の目標は4つあるが、これについては割愛し、授業の構成について説明する(図1を参照)。授業時間は7時間を費やし、6時間目は公開授業とした。「身近な地域への関心を高める」という学習の目標に沿う形で1つ目では、「自分たちにとって身近な地域とはどこからどこまでだろう」ということを考えた。これが先述のアンケートのことである。具体的には、南北に関しては、北は中島公園から南は藻岩下、東西については、東は豊平川で西側は中央図書館の辺りで、生徒達はこの範囲を「身近な地域」と感じていたようである。

生徒にとっての身近な地域を山鼻地区と設定した段階で、次に山鼻地区自体が札幌市中央区のどの辺りに位置しているのかを、5万分の1の地形図を使って確認した。こうした作業のなかで、山鼻地区は札幌市の中心部に位置していることを改めて感じた生徒や、中央区は考えていたよりも広いと感じた生徒もいた。また、自分たちは中央区の真ん中に住んでいるというイメージを持ってい

た生徒は、山鼻地区というのが意外にも端のほうにあることを知るということもあった。このように、1時間目の授業では、生徒たちのイメージを覆して身近な地域への関心を高めることができた。

2時間目、3時間目、4時間目は、様々な地図やグラフなど、複数の資料を使って札幌市の特徴を大まかに捉えた。札幌の地形や、札幌の産業、それに札幌の工業などを学ぶという点では、これは今までの授業とは大きく変わっているわけではない。工場のマークを探して印をつけたり、田や畑、果樹園はどこに多いか探したりといった地図作業を通して、札幌市の産業や工業、地形を捉えるという授業である。

このように中央区の確認作業を行った上で、人口の話へ移っていくことになった。その際、「札幌にはいくつ区があるか」という問を発して見たところ、中央区の他、北区、南区、東区、西区、豊平区、白石区くらいまでは答えられるが、手稲区を答えられない生徒や、厚別区を知らない生徒もいた。清田区は札幌ドームの関係で知っている生徒が多かったが、子供たちにとっては、札幌には意外に区が多いという印象があったようだ。そこで、なぜこんなに区が増えているのだろう、という問いから人口との関係を授業で扱うようになったわけである。

5時間目に入って、「札幌市の人口はどうなっているか?」と問いかけると、誰もが「増えている」と答えた。「それでは、人口が増えると町はどのように変わるのか?」という質問を出した。生徒たちは、今まで学習してきたことから、人口が増えれば当然お店が増える、学校ができる、道路もできる、住宅も増える、また、畑や空き地が少なくなっていく、と考える。逆に「それでは、人口が減ると街はどのように変わると思うか?」という問には、お店が減る、住宅が減る、学校が廃校になる、空き地も増えてく、という答えが返ってくる。人口の現象に関しては、札幌を事例に考えるのは難しいと思ったので、夕張の話を事例に引き出して確認した。

こうしたことを確認したうえで、人口の増えている札幌では、実際にどのように街が変化しているのかを考えることにした。事例としては、手稲

区の星置地区に知り合いの先生がいたので、その先生のご協力を得て、星置地区の街並みの変化を考えることにした。具体的には、生徒たちが生まれた頃と現在の町並みの変化を考えていったわけだが、教室にはコンピュータがあるわけでないので、OHPを利用して授業を行った。

中学校2年生の生徒たちが生まれた頃、つまり14年前の星置地区の様子を見ると、空き地が多く、畑も多い。また、大きなマンションもない。その一方で、現在の街並みを見せると、生徒たちは「おお、すごく変わった!」と食いついてくる。

そこで、そうした変化を地図で確認しようみたいということになり、住宅地図を使って調べてみ

ることになった。地図の学習で住宅地図が適しているかどうかは問題があるだろうし、本来であれば、5万分の1とか1万分の1の地図がいいのかもしれないと考えたが、街の変化をより具体的に細かく分からせたいと考え、住宅地図を使うことにした。そのなかで、人口が増えると、「本当にお店が増えたんだ」とか、「あ、学校もできている」、「道路も増えている」という発見ができたようである。そして、最も明瞭に分かったこととして、「畑や空き地がどんどん少なくなっている」という点があげられる。こうした変化は写真でも確認できたし、「実際に行ってみてみたいなあ」という生徒も出てきた。実は、こうした作業は前振りで、

時	学習目標	子供の活動・思考の流れ	教師の意図・かかわり
1	身近な地域への関心を高める。	<p>自分たちにとって「身近な地域」とはどこからどこまでだろう</p> <p>南北・・・中島公園～藻岩下まで 東西・・・豊平川～中央図書館まで</p> <p>山鼻地区は、札幌市、中央区のどのあたりに位置しているのか、地形図を使って確認しよう</p> <p>札幌市の中心部に位置している 中央区は思ったより広いな</p>	<p>身近な地域の範囲を北は山鼻小学校、南は山鼻南小学校、東は豊平川、西は藻岩山の麓とする。</p> <p>国土地理院発行の5万分の1の地形図を利用する。</p> <p>札幌市、各区の範囲も確認する。</p>
2 3 4	地図やグラフなど、複数の資料を読み取る。	<p>地形図を使って、札幌市について調べてみよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 札幌の地形 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 河川・・・豊平川</li> <li>・ 山地・・・南西部から西部</li> <li>・ 丘陵・・・南東部</li> <li>・ 扇状地・・・札幌扇状地, 発寒扇状地</li> </ul> </li> <li>・ 札幌の産業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ たまねぎ・・・東区, 北区など</li> <li>・ 果樹・・・南区</li> </ul> </li> <li>・ 札幌の工業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 西区, 東区, 清田区</li> <li>・ 食料品, 金属加工, 印刷出版</li> </ul> </li> </ul>	<p>地図記号, 縮尺など地図の約束ごとにもふれる。</p>

図1 単元構成(7時間扱い, 本時6/7)

5	街並みの変化と人口の変化の関係を抑える。	<p>人口が増えると街はどのように変わるのか、具体的に調べてみよう</p> <p>お店が増えた 住宅が増えている 学校ができた 畑や空き地が開発される 道路が増えた</p> <p>人口が減ると、街はどのように変わると思う</p> <p>お店が減る 住宅も減る 学校が廃校になる 空き地も増える</p> <p>人口が変わると、街並みも変わるんだ</p>	<p>手稲区(星置地区)を例に考える。</p> <p>新旧の地図を使い、街並みの変化と人口の変化には深い関わりがあることを抑える。</p>			
6	<p>街並みの変化を人口の変化と結びつけて考える。</p> <p>複数の資料を比較し、考察する力を身につける。</p>	<p>山鼻地区の人口は、どのように変化したのかな</p> <p>当然増えている、変わらない、減少した</p> <p>山鼻地区の人口は、なぜ変化していないのだろう</p> <p>新旧2枚の地図を比較し、街並みの変化を調べよう</p> <p>マンションが増えた 家がなくなり空き地が増えた</p> <p>人口に大きな変化はないけれど、山鼻地区の景観はこんなに大きく変わっている</p>	<p>山鼻地区の人口の変化を提示する。</p> <p>マンションなどの住宅が細かく記載されている、住宅地図を使う。</p>			
7	<p>山鼻地区と比較して、大通地区の役割を考える。</p> <p>身近な地域を含め地域全体の特徴をまとめる。</p>	<p>大通地区と山鼻地区を比較し、大通地区の昼間人口と夜間人口の差が大きい理由を考えよう。</p> <table border="1" data-bbox="409 1136 954 1381"> <tr> <td>大きなビルが多く、会社や銀行が集まっている。市役所や道庁も官公署も多いから昼間人口は多いんだ。</td> <td>大通は札幌の中心だから交通機関も都心部に集中しているな。</td> <td>ビルが集中しているし、土地も高いから、住宅地も少ないだろうな。</td> </tr> </table> <p>大通地区は、市役所や道庁、多くの会社や商店街が集中している。また、あらゆる交通機関もこの地区を起点に発着しているため、多くの人が集まってくる。しかし、住宅地が少ないため夜間人口は少ない。</p> <p>中央区は、中心部に札幌の政治的・文化的・経済的な中心的な機能をもつ地域と、その周辺に山鼻地区のような住宅街が広がり、西側には多くの自然をもつ区である。</p>	大きなビルが多く、会社や銀行が集まっている。市役所や道庁も官公署も多いから昼間人口は多いんだ。	大通は札幌の中心だから交通機関も都心部に集中しているな。	ビルが集中しているし、土地も高いから、住宅地も少ないだろうな。	<p>中央区ガイドを使う。</p> <p>中央区が札幌市の都市機能の中核を担っていることもおさえる。</p>
大きなビルが多く、会社や銀行が集まっている。市役所や道庁も官公署も多いから昼間人口は多いんだ。	大通は札幌の中心だから交通機関も都心部に集中しているな。	ビルが集中しているし、土地も高いから、住宅地も少ないだろうな。				

図1 つづき

同じことを、この身近な地域、つまり自分たちの住んでいる地域で行ったら子どもたちはどう動くのか、というのが狙いとしてあった。その前段階として、手稲区の星置地区という極端に変化した地域を取り上げたわけである。

## V. 自分で調べる学習

さて、6時間目に入った段階で、公開授業を行った。「町並みの変化から、山鼻地区の人口、あるいは自分たちの住んでいる地域の人口はどう変わったのか？」と聞いたところ、いろいろな意見が出てきた。「札幌の人口が増えているのだから、当然、自分たち中央区の人口も増えていないわけがない」という意見が大半だったが、「変わらない」、あるいは「減少したんじゃないか」と言う生徒もいた。実際に人口の数字を見せると、実はほとんど変わっていない。山鼻地区の人口がなぜ変化していないのだろうか、ということに生徒たちが疑問を持つわけである。この前段階で、「当然増えている」と言った生徒たちは、「中央図書館の周りに団地ができた。だから、あの地区の人口が増えているはずだ。マンションがどんどん立っているから人口は増えているはずだ」と主張しましたが、その一方で、「変わらない」と言った生徒は、「何か壊されてマンションになっている。だから人口は変わっていないんだ」と主張した。また、「減少した」と言った生徒は、「自分のお兄ちゃんの頃は6学級だったけど、今自分たちは5学級だ。上級生は4学級のところもある。ということは生徒が減っている。生徒が減っているということは人口も減っているんじゃないか」と、一応の理由をつけて説明できた。

しかし、統計や実際の数字を見ると、本当に変わってない。それなら、どうやってこれを確かめたいのか、なぜ人口はどうして変わってないのか、どうやって調べたいのか、ということ考えた。今回の地理学習では、調べ学習というもの大きなポイントなので、こうした質問を出す、その手段として最初に出てくるのがインターネットで調べれば良いということになった。山鼻地区の人口の変化などは、インターネットには載っていないのだが、生徒たちはインターネットで調べられると主張したのである。次に、百科

事典や本で調べるという意見が出てきた。それでは分からないだろうと言うと、今度は、昔から住んでいる人にインタビューすればよいという生徒もいて、これは良い意見だなと思われた。それ以外にも、前回の授業で行ったように、「古い地図と比べる」、「小学校に行けば文集や写真があるから、古い写真と比べればよい」など、調べ方もいろいろ出てくることになった。そして、この回の授業では、古い地図と新しい地図の2枚を比べて街並みの変化を調べるという方向に展開していったのである。

実際に地図で確認してみると、マンションは急激に増えている一方で、家がなくなって空き地になっているところもあった。このように、生徒たちは複数の地図を比較していく中で、人口に大きな変化は無いが山鼻地区の街は大きく変わっているということに気がついていった。つまり、自分たちの住んでいる街は、人口こそ変わっていないが、星置地区と同じように変化している街だということに、最終的にはたどり着いたわけである。

生徒たちの作業というのは、非常に狭い範囲内での作業であったため、私のほうで山鼻地区の住宅地図を全部つないだものを1枚作っておき、子どもたちに作業をさせた後に提示した。そして、昔と変わっているところに印をつけていく作業をすることによって、実際の町並みの変化を地図の中で確認することができた。その後の話になるが、生徒のなかには、「今まで何気なく通学してきたけど、学校に来る途中にマンションが建っているところを数えたら4ヶ所あったよ」とか、「あそこの古い商店街が無くなっていったことに、今気がついたよ」という話をしてくれる者もいた。授業の中では、フィールドワークというものを設けることはできなかったのだが、このような身近な地域の学習を校区という範囲内で行ったことによって、生徒たち自身が登下校の中でフィールドワークのようなことを行ってくれたわけである。

こうしたことは非常に効果があると考えられたので、今度は宿題として、「これから3日間、登下校の時に少しルートを変えて、次の社会の時間に発表してごらん。」ともちかけたところ、様々な意見が出てくることになった。「児童会館が増えてこんな風になった」とか、「病院ができた地域がある」

といった意見が出てきたので、生徒たちはフィールドワークでよい活動をしているという印象を受け、今回の活動が非常に有効なものであったと感じることができた。

こうした授業を受けて、最後に7時間目の授業を行うことになった。今度は、山鼻地区と比較する形で、大通り地区の役割を考えさせるという目標を立てた。つまり、最終的に中央区という範囲でまとめを行いたいと考えていたので、中央区の中で山鼻地区は住宅街としての役割があるとすれば、中心である大通り地区はどういう役割なのかということ、やはり人口という視点から授業を進めた。大通り地区について考えるにあたっては、単なる人口ではなく、昼間人口と夜間人口の違いを取り上げた。人口にもいろいろあるという知識も身につけさせたかったので、この2つの人口を使って授業を行ったわけである。このように人口を切り口にして、5時間目、6時間目、7時間目の授業を行い、町並みの変化を考え、そこから生徒たちに、実際に見てみたいという好奇心を持たせて、さらには自分で調べてみたいと思わせる授業を作ったわけである。

## VI. おわりに

このように人口を切り口にして、身近な地域の学習を行ったわけだが、この身近な地域の学習の上に、都道府県単位での調査を行った。今度は、都道府県の調査も人口を切り口にしたのだが、私のほうから言わなくても、生徒たち自身で、たとえば北海道の地域を学習するとき、人口が増えている地域はこことここにあるとか、それなら減っている地域はどこなのだろうか、ということ、各都市を調べてみたりできるようになった。また、全国レベルでの授業を行ったときは、東京都と沖縄を取り上げたのだが、その場合も、まず人口を切り口に、人口や街の変化などを見る授業を行った。もちろん、人口からだけではその地域すべてが見えるわけではなく、あくまでも導入であるが、ひとつの地域の特色を捉え、そして視野を広げていくという形はうまくいったと考えている。現在では、たとえば産業を導入部分にすることもあるが、切り口を一つ示して、生徒たちにその地域の特色を捉えさせて、さらにそこから地域

理解を深めるという形で、自分で調べることを重視した授業を行った。以上が、私の授業実践の報告である。